法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

金刀本『平治物語』の頼朝造型 : 源氏再興の視点から

川田, 正美 / カワダ, マサミ / KAWADA, Masami

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
65
(開始ページ / Start Page)
72
(終了ページ / End Page)
81
(発行年 / Year)
2002-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020202

金刀本『平治物語』の頼朝造型

――源氏再興の視点から――

川田　正美

1

1

『平治物語』の主題が平治の乱にあることはいうをまたないが、「源氏の再興」ということもまた重要なそれであるとみなされる。本稿はこのことについて考察したいのであるが、これについてはしばらくは物語の傍流とみなされてきた。

その代表的なものは、永積安明・島田勇雄校注『平治物語』[注1]補注にみられる。そこでは「金本［金刀本］[注2]は、頼朝が伊豆に下着したところで完結するが、学本［学習院本］・活本［古活字本］はともに、牛若の事をはじめ長文の源家後日譚を付載する。年代順に記された学本によれば、仁安の難波説話は、平治の物語として年代的に見ても、まさに後日譚の一部に違いない。そこで金本は年次を切り捨てたばかりでなく、A群以外の後日譚をも切捨て、頼朝伊豆下着でもって物語を結末させた」と見、「素朴な年代記的な学本から、集中的な構成を持つ本文に改変せられた」「金本は、すでに年代記的な叙事詩的方法よりは、内面的・物語的な文学の方向へ進んで」「保元・平治のいずれにおいても、その結末の大胆な整備が典型的に物語るように、その文学的な構想力において最も成熟した段階のものであることを示している」と評価する。そして「年代的で、記録的傾向が強い」一類本については、「物語の結末に、平治の乱の後日譚を語り続け、頼朝による源氏再興の実現までを展開しており、平治の乱そのものの物語としては集中性に欠ける」「構成の未熟さ」を指摘している。

こうした評価に対し、山下宏明氏は「第四類本との比較が、第一類本の評価の裏付けとなるのであるが、物語としての読みから言えば、まさにこの『未熟さ』に、物語の主題を単に平治の乱とすることをためらわせる側面がある」とし、「筆者の読みによれば、この、一見余計な話に見える源氏再興を語らねばならぬ、その契機が常盤の物語にも読み取れそうである」とみ

て、「源氏再興を語る後日談との関連から、それが物語においていかなる意味を有しているかを考える」論を展開された。[注3] その結果、「義朝の遺志を頼朝・義経が継いで源氏再興の目的を達成したこと、その一門の志の達成を支え活力を与えるものとして、いわば巫女としての常盤の参加があること」を述べられたのである。

しかし第四類本でも、この源氏再興は見られないことはない。[注4] 山下論のほぼ十年後に日下力氏は、『平治物語』における源氏をめぐる記事について、より踏み込んだ考察を展開された。[注5]

氏はまず、「従来『平治』は後出本「＝四類本」が享受の対象であった為、『保元』と共に源氏中心の物語と考えられてきた。古態本「＝一類本」でも、中巻から下巻へと圧倒的に源氏関係記事が増えてはいくが、そこでは後述するように、記事の大幅な増補の痕跡のあることがまず考慮されねばならない」とし、「源氏の悲劇に焦点を合わせる後出本では、作品の前半からそれを暗示させる記事や、頼朝による再興をほのめかす叙述が顔を出すが、古態本にはそれがない」ことを指摘される。そして具体例を挙げた末、「源氏の将来を見通す視座は、当初の段階では作中に設定されていない」。また「物語の最後にある牛若奥州下り以降のいわゆる源家後日譚をはじめ、悪源太が経房を蹴殺したという話や、頼朝の配流に際しその将来を夢合せしたとして登場する盛康の話などは、増補された可能性が極めて濃厚なのである」とされた。

その裏付けとして常葉譚[注6]を詳細に分析し、その中で「頼朝の場合はより明瞭で、戦闘終結の段階まででではわずか三度、名前のみを記されるに過ぎない存在であった彼が、ここらあたりから復讐を遂げるにふさわしい人格を付与されて描き出され始める。即ち、物語の前半世界に見出し難かった源氏再興を予知させる文面が顕現してくる」こと。「頼朝助命話に先立ち、常葉母子の話と絡めて義朝の死を伝える金王丸の報告談」の談話中で二度の頼朝の落後が詳しく語られるにもかかわらず、後日の彼を意図的に暗示するような文言が目に入らない」こと。さらに「最初の落後話では、みごとに独力で危機を切り抜けたいきさつは伝えながら、よりそれをふくらませて将来の征夷大将軍にふさわしい行為であったとまでは語ろうとしないし、義朝の称賛の言葉も、大人に劣らぬ立派な行為という以上のものではない」ことを挙げ、「この点、頼朝助命話とは落差があり、源氏の未来に対する記事の淡白さは、原話にほとんど手が加えられていない事情を思わせる」とされる。そして「常葉譚を外部より持ち込み、頼朝助命話と連携して語り出したあたりが、『平治物語』における改変増補の最初の着手であった可能性が」あり、「当初の作品構想の方針を変え、新たに源氏による天下掌握までを見通す視点を自ら加えたことになるだろう」とされたのである。

2

古態本と後出本における源家譚の存在をめぐる論議はほぼ以上のようなものであるが、ここで三つの点が究明されなくてはならないことになろう。

第一に、古態本では終部近くに至って増補されたとされる源

家譚の要素は、後出本では源氏再興という形でみえるわけだが、その内実は具体的にはどのような形で現れているか。

第二に、そのような形をとる、つまり源氏再興をにおわすに留める後出本の企図はどのようなものか。

さらに第三に、源家譚が古態本に付加されたとなると、その古態本と後出本との、全体の先後関係はどのように見直されなくてはならないか。

小稿では、以上の点を追ってみたい。ここに、一類本（古態本）は陽明文庫本（陽本と略す）と学習院本（学本と略す）を、四類本（後出本）は金刀比羅本（金本と略す）を用いる。[注7]

II

1

まず第一点の、源氏再興の要素が後出本ではどのように現れているか、であるが、これについて初めに、金本において、義朝に源家再興の意思が顕著にみられることを追ってみよう。

それは開巻まもない「信頼、信西を亡ぼさるる議の事」で早くも現れる。義朝は信頼に謀反を持ちかけられたとき、「保元に一門兄弟失ひはてて只一身に成て候へば、平家もいぶせく存候。よく候べき」と、鬱積していた平家への対抗意識をもやしている。だが陽本では、「去保元のみたれに・・・義朝一人にまかりなりて候へは、清盛も内〳〵、所存こそ候らめ。これは存じのまへにて候へば、おどろくべきにあらず。かやうに頼みおほせられ候へば、御大事にあいて便宜候はば、当家の浮沈をもこころみ候はん事、本望にてこそ候へ」と、対平家意識についてはここにもみられる（傍線部）ものの、それは金本ほどの対決姿勢にまでは高まらず（点線部）、源家興隆（「当家の浮沈」）の意義はあくまでも二次的なもの（「便宜候はば」）に追いやられている。

また、金本「源氏勢汰への事」で義朝は、「もし又今度の合戦に打負たらば、東国へ馳下、大勢をもよほして、後日に都へ入、平家をほろぼし、源氏の代になさん事、何のうたがひかあるべき」と、東国での再起を期しているが、これは陽本ではみられない。

この東国での再起については、学本では別の箇所にみられるのだが、そこでは義朝の従者によって発せられている。すなわち「六波羅合戦の事」で金本の義朝は、源氏の劣勢に討死しようとするが、鎌田がこれを制止する場面がある。ここで学本の鎌田は東国での再起を提言している。続く「義朝敗北の事」でも学本では、一行が敗走の途次に立ち塞がった山法師を打破した後、義範や義盛が暇乞いする際に発する東国での再起を期す言葉は、先の鎌田のそれと一致しており、これも金本には見られない従者の言動なのである。

つぎに、義朝の源氏再興の意思を継ぐべき頼朝についてはどう現れているか。

「義朝奥波賀に落ち着く事」・・・逃避行する義朝の一行にはぐれた頼朝は、それを追う途次、雑人を追い払ってようやくたどり着く。そのことに義朝は、「あっぱれ末代の大将かな」

と、頼朝の将来を予言する。この賛辞は学本にない。

「頼朝青墓に下着の事」：追われる身となった頼朝は、辛苦の末に青墓の宿にたどり着く。その時助けてくれた鵜飼いを、頼朝が世に出たとき勧賞するという後日談を、金本は載せる。

「頼朝生捕らるる事」：・・・頼朝は青墓の宿で捕らえられる。彼が所有する名刀は彼の機転で無事だったが、その間に、宿の長者は「平家の運すえになりなむ時、源氏世に出給はぬ事はよもあらじ」と言う。この話は学本にない。

「頼朝遠流に宥めらるる事」：・・・亡父を弔う頼朝が描かれるが、学本では処刑が伸び伸びになる際、「命だにたすかりたらば、などか本意をとげざらむ」と打倒平家の意志を示す。これは金本にないが、後に付加された故事の末尾で金本では、ある人が「頼朝命を生んといふは、人となつてのち、親の敵なれば、平家をほろぼさむとやおもひなして申候らむ」と想像する。

「常葉落ちらるる事」：・・・金本では、義朝の愛妾常葉は、休ませてくれた宿の主に「世にあるともきかばたずねよ。我もわするまじきぞ」と言いおく。これは、先の頼朝の鵜飼いに対する言葉と類似する。

「頼朝遠流の事」：・・・出京する頼朝を見た法師らは、「伊豆国にながしおかば、千里の野に虎の子をはなつにこそあれ。おそろし〜〜」という。これは学本にない。道中頼朝は、建部宮に再入京を祈る。これに学本は、熱田宮での再起祈願を付加する。守康による源氏再興の夢合せに、頼朝は「うちうなずきうなずき」する。学本の彼はさらに、盛康から千人に一人の身と告げられ、出家を思いとどまる。

このように特に金本では、源氏再興という要素はまず義朝にその意思が示され、次いで頼朝がそれを引き継ぐ形で随所に示されていることが明らかである。

2

しかし、金本における源氏再興の扱い方は学本のようではない。

まずその位置であるが、両本の相違はそれぞれの結末部分に顕著である。すなわち学本では、結章が「頼朝義兵を挙げらるる事」と銘打たれていることに象徴されているように、源氏再興の成就を、読み手は物語事実として自ずと確認できるようになっている。

それに引き換え金本は、結章「頼朝遠流の事」の結びが

弥平兵衛宗清はそれより都へかへりければ、兵衛佐殿なごりおしげにぞみえさせ給ひける。さるほどに、伊豆国蛭が嶋にをきたてまつり、官人都へのぼりけり。

となっているように、頼朝の将来をなにがしか予感させるところにとどめている。もとより読み手は、彼の大成は先刻承知のはずである。だが金本の書き手はそのことを前提にしながらも、あえて物語の中では、彼を未完の大器として予兆する形をとっ

ているのである。

そこで改めてⅡの1に挙げた数々の例をみると、それらはいずれも、頼朝がゆくゆくは源氏再興の担い手として大成することを、享受者が承知ずみであることを前提としなければ書き得ないことばかりであることがわかる。

このように金本は、学本が巻末に明示した頼朝の大成という既成事実を、あえて全体に散らばらせ、それをほのめかす方法を採っている、とみられるのである。

Ⅲ

1

さてでは、このような位置と方法を有する金本の源氏再興の内実は、学本とどのような違いを持つか。いまみた頼朝造型をめぐる具体的内容をさらに追ってみることにする。

まず義朝の逃避行を語る「義朝奥波賀に落ち着く事」であるが、これ自体、両本でかなりの相違が見られる。それは金本では、都をあとにした一行の足取りを一般的な地の文で逐一追っていくのに対し、学本では、義朝の童・金王丸が常葉に直接報告する形をとり、しかも学本は、その冒頭で義朝が討たれたことを告げてしまう。

このような叙述方法の相違は、両本の企図の違いを窺わせる。すなわち学本では、息もたえだえの金王丸であるため、義朝の死に至った顛末をば要点を押さえて伝えるという制約があるのに対し、地の文による金本では、義朝の逃避の過程を、諸人物の動きを交えつつたどっていく。

そうした叙述の中で頼朝は描かれることになるので、学本では、馬眠りして一行にはぐれた彼が後を追うその途次、雑人を追い払ったその報告のみであったのが、金本ではその戦いぶりが詳しく述べられる、という違いとなって現れている。そうした中で金本の義朝は、義平の難くせにもかかわらず、頼朝の活躍に「末代の大将かな」と予言的賛辞を贈るのである。

本章段後半の義朝による朝長斬首の一節も、上と同様のことがいえる。学本における一つ一つの出来事の断続的羅列は、話し手の金王丸が時間の推移のままに話をつなげていることに因ろう。対する金本では、義朝と朝長をめぐり遊君が関わるというように、奥波賀の宿を舞台とした人々の主体的な動きが多面的に描かれる。義朝が朝長を叱責し、次いで「頼朝は少くともかやうにあらじものを」とここでも信頼を惜しまないのも、上と軌を一にした事情に因ろう。

次の「頼朝青墓に下着の事」では、「頼朝のありさま承るこそあはれなれ」で始まるように、既に落人となったことに絶望して自害を思い、仏に祈るしかない無力な彼がある。しかし金本は、捕らわれの危機を助けてくれた鵜飼いを勧賞したという後日談を載せ、「情は人の為ならずとも、かやうの事をや申べき」と締め括っている。

さて『平治物語』は、金本では下巻のこの「頼朝青墓に下着の事」に入るあたりから学本と大きく章段の構成が変わるだけでなく、叙述方法にも大差がみられる。すなわち学本では、弥平兵衛宗清が頼朝を捕らえたこと、青墓で朝長の首を見つけた

ことをまず記し、後半で、頼朝が宗清に捕らえられるまでを述べている。頼朝生捕りという結果を先に出し、話を遡らせて事実の経過説明を主としている点は、先の金王丸談と同じであるだけでなく、学本では宗清が主体となってかかれているのが特色である。

これに対し金本では頼朝が主体で、彼は辛苦の逃避行の末、青墓の宿に辿り着くが、そこで宗清に捕らえられる。そして宿の長者の大炊が宗清の命を知らせ、孫の夜叉御前が悲泣するなど、ここでも遊君が関わっていることも特色である。加えて金本では、頼朝の自害を平氏の侍らが制止するという場面もある。

次の「義朝内海下向の事」で義朝は最期を遂げるが、前述のように学本では、金王丸談の冒頭で端的に告げられるのに比し、金本ではそれを劇的に詳しく述べている。ここで前の章段を振り返ると、そこには結局は逃げ切れなかった頼朝ではあったが、一行にはぐれたことで命を永らえ得た、つまり源氏再興の種は残存できたことを確認した上で、読者は義朝の死を記す本段に進むことができるといえる。つまり、まずは義朝の死から切り出す学本の絶望的語り口と対照的に、金本は再興の展望を与えながら叙述を進めているといえるのである。

さて金本では、ここの冒頭でも義朝は「これより尾張の内海へ付ばやとおもふがいかに」と、いぜん再起の道をあきらめていないこと。また、大炊の弟の玄光が一行を送る途次、またも義朝が自害をはかり鎌田に止められるなど、これまでの叙法が再見されるのも注意される。

金本の「頼朝青墓に下着の事」で頼朝に関わった遊女は、「頼朝生捕らるる事」でも更に活躍する。清盛が欲した名刀鬚切を惜しんだ大炊は、その代わりを渡して彼を欺くが、この策も頼朝の「あらぬ太刀よとおもはれけれども、大炊も子細ありて鬚切をばとどめたるらん」との機転があればこそであった。そして彼女の判断は、「平家の運すゑになりなむ時、源氏世に出給はぬ事はよもあらじ」との予測によるものだったのである。

「頼朝遠流に宥めらるる事」では、頼朝が死罪を免れ得たのはどんな経緯によってであったかを記す。金本では、父の菩提を弔うべく卒塔婆をつくりたいとの頼朝の孝心に感じた丹波国弘が、宗清にこれを伝える（①）。そこで彼は池の禅尼にその命を乞い請けに行き、頼朝がわが子に生き写しと聞いた彼女は、重盛を通じて清盛に働きかける（②）。このように金本では、頼朝は父の菩提を弔うための延命を望んだこと。彼の助命に次々と保護者が動いていることが特色である。

だが学本では、①と②が逆転し、頼朝の助命は一般の「人」がその「をとなしやか」さによったからであった。そして池殿にかけあうのは頼朝自身であり、延命が現実化する中で「命だにたすからば、などか本意をとげざらむ」と打倒平氏の意志が芽生えることになる。そうした彼を、作者は「おそろしき」というのである。

さて「常葉落ちらるる事」から、話は常葉の逃避行に移る。金本では、母子が安らいだ家は、貧しいながら温かさをみせるところは先の鵜飼いに通じる。さらに出立の際に常葉が主に

「世にあるともきかばたづねよ。我もわするまじきぞ」といいおくのも、先の頼朝の言と重なる。しかるに学本では、主の方が常葉に再来訪を申し出ているのである。

次の「常葉六波羅に参る事」で、学本の彼女は、子よりも母を助ける決断を述べて母は許される。そして次に、親である常葉が子の身代わりとなる提案となる。対する金本では、母の助命のために出頭した、と述べはする。だがその直後には、子よりも常葉自身の命を絶つよう乞い請けてしまうのである。こうした絶望的状況の解決が彼女の美貌なのであった。学本では、子の行方は彼女の美貌とは無関係であり、清盛は子の処分は権限外であるとする。この清盛の態度は、先の「頼朝遠流に宥めらるる事」での、頼朝助命へのあいまいな態度と同じである。

その頼朝の命はここでようやく流罪となり、さらに幼子らも助かる。このように金本では、常葉の努力が子・頼朝の救命に直結した構成であることが明らかである。

さて金本では結びとなる「頼朝遠流の事」では、頼朝の大成については、それまでの予兆的筆致から一歩進んでくる。頼朝は池殿に別れ出京するが、「千里の野に虎の子をはなつにこそあれ。おそろし〳〵」と法師がいう（①）。また瀬田では宗清の諫めも容れず建部宮で帰京を祈るが、これも「おそろしき」と評される。そして守康の源氏再興の夢合せに、頼朝は「うちうなずきうなずき」するのである（この金本の、一歩進んだ頼朝の書き方についてはⅣで考えたい）。

これらを学本でみると、①はないが頼朝は建部社では通夜し、守康の夢合せに「ほれ〳〵と」する。さらに熱田宮で再起を祈願し、守康から千人に一人の身と告げられ出家を思い止まり「心の中こそ怖けれ」と評される。この辺り、ほぼ両本は合致している。

ただ学本での頼朝は、池殿訪問の一度目では伺候人を求め、下京途次で季道の狼藉を制し、さらに盛康を帰すなど随所に大人びた言動をみせている。これは学本の「頼朝遠流に宥めらるる事」での「をとなしやか」さに通じる態度であり、先の出家の思い止まりとも併せ、総じてこの辺りの学本は、金本と比べて頼朝の主体性が目立つ。これはこのあと「頼朝義兵を挙げらるる事」をおく学本としては、当然の流れといえよう。

2

以上縷々みてきたことにより、金本では次の特徴が指摘できよう。

（1）源氏の再興を担う頼朝の延命をはかるべく、彼の周囲にはさまざまな人物が行動していること。

（2）しかし当の頼朝自身は、源氏再興に初めから積極的とは言い難いこと。

この点から筆者は『平家物語』の「福原院宣」における頼朝を連想せずにはおれない。しばらく、拙論[注8]よりその部分を引用させていただく。

> …頼朝の人物を見込んだ文覚の勧めに対し頼朝は…頭から応ぜず、平氏の恩に固執する。…そこで文覚は、義朝の頭骨とやらを取り出して、自分がこれを長いこと首に

かけ弔って回ったと頼朝に売り込み、彼の心を揺さぶろうとする。…ここで頼朝は「一定とはおぼえねども」「父のかうべときくなつかしさに…其後はうちとけて物がたり」するのである。

…彼は、話にすぐに飛びつかぬ慎重さの持ち主である。彼は自分の限界をよく心得ていた。すなわち伊豆の蛭嶋に流されたえず監視の眼に曝されていた源氏嫡流の身という限定に加えて、全国に点在している源氏系の武士がどこまで従ってくれるかは保証の限りではなかったということである。

しかし彼は文覚の熱意にほだされ、一歩を踏み出す。彼の頭骨までも用いた演出をマユツバとは疑いつつもそれを頭からあしらわなかったのは、そのような虚偽を用いてまでも自分を守り立てて蜂起を促してくれる者の存在に心を動かされたからであろう。…彼は、人間の意を汲むことのできる人物であった…。

当初は消極的でありながら自分を押し上げてくれる周囲の期待に応えて起ち上がる頼朝――その姿勢は、いまみた金本『平治物語』の彼とまさに重なり合うものであろう。

しかるに学本では、そのような頼朝はしばらく現れず、物語の終り近く頼朝出京の節で忽然と再興の意志を示し、しかもそれは自発的である。その強い希求の先に、結章の挙兵の節が直結していくのであるが、そこでの頼朝は、父義朝を手にかけた長田父子をなぶり殺すなど、金本初期のおどおどした姿とは隔絶した確固たる政略家の像である。そしてこうしたところは、これまた『平家物語』終部における徹底した残党刈りの姿と重なり合うのである。（こうしてみると、『平家物語』は青年期と壮年期と、頼朝の全行程を覆っているのに対し、『平治物語』では前者は金本に、後者は学本にと分担されている、といえよう。）

このように学本とは対照的に金本は、多くの人々に支えられ励まされながら成長していく頼朝の若き日の姿を刻むことによって、平氏の体制を突き崩す旗手の登場を予兆させる――このような企図をもって、源氏再興を担う頼朝を描こうとしたのではないか、とみるのである。

Ⅳ

最後に第三点目、以上のような内実が明らかにされた学本と金本の先後関係を、ではどのようにみるべきか、ということである。

この成立論については研究の成果に甚だ暗い上、確たる根拠のないまま憶測を重ねることになるので、ささやかな問題提起にとどめたい。

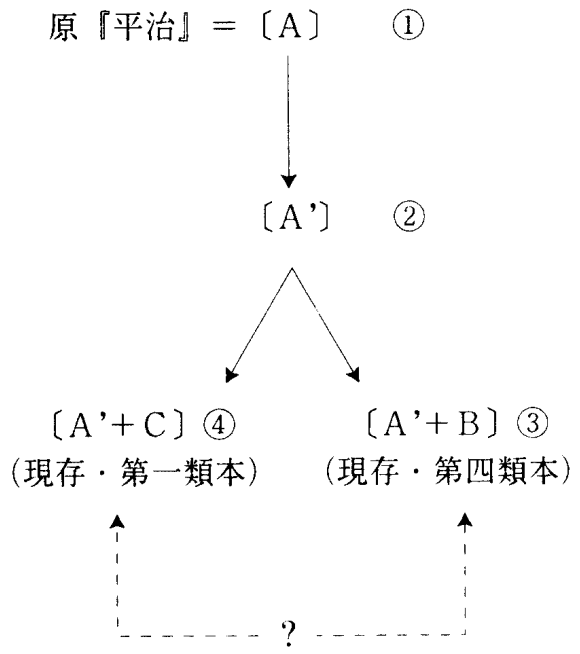
まず、学本と金本の成立の推移について、である。

原態本は平治の乱の叙述を中心としたであろうが、それを基底にした増補要因が源家記事であるとみた場合、その導入過程には二通りが考えられる。

一つは学本のように、天下を掌握した頼朝の権力行為をじかに描き込む行き方で、これは当然支配層の手によったであろう。もう一つは金本のように、源氏再興の担い手としての頼朝を間接的に採り入れる行き方で、これは体制変革を庶幾した階層が、その具現者としての頼朝を描いたものとみられよう。

ではさらに、その改変過程をどうみるか。学本内容が金本内容に改変されたのか。逆に、金本内容が学本内容に改変されたのか。

この点を含め、筆者の考える諸本の推移過程を示すと、別表のようになる。



すなわち、平治の乱（A）を基にした①から、それを敷衍した内容（A'）の②へ。その②を素に、再興の担い手頼朝の要素（B）を混入させた③が成る。一方そうした流れをよそに、大成した頼朝が強調された（C）を増補した④が作られた、とみるのである。

そして③と④は、当初は個別に作り上げられた、とみてよいかと考えるが、金本では頼朝を将来の変革の担い手として理想化しているのに対し、学本では頼朝の大成をあからさまに描くと同時に、末尾では義経の存在を高評（これは、いわゆる「判官びいき」に通じる）して結んでいる。よって、頼朝を軸とした源家関係記事に限ってみれば、金本のあとに学本が成った、とみるのが至当であろう。

最後に、金本においての大成をほのめかす一連の書き方と、先（Ⅲの1）にみた結章「頼朝遠流の事」における再興の決意に踏み込んだ記述との断絶についても検討しなければならない。

これは一つには、ずっと頼朝の大成を暗示してきた作り手ではあったが、最終章はさすがに、本人に再興の決意を明瞭にさせる形をとらざるをえなかった、とみることができる。

しかし、かかる内発的なものでなく、大成を誇示した④の存在が、ここにきて無視できず挿入を余儀なくされた、という見方もとる余地があろう。

こうした、学本による金本への外発的な侵食がなされたとすれば、それはひとり源家再興にとどまらず、頼朝に変革の旗手としての役割も託そうとした金本の叙法の終焉を意味したものといえるだろう。

注1　日本古典文学大系『保元物語　平治物語』
注2　拙稿では、諸本の系統を大系本と同様、次のように分類する。
一類本＝陽明文庫本、学習院本　四類本＝金刀比羅本
注3　「『平治物語』の読み」（『文学』一九八四・四）
注4　岡田安代「『平治物語』―語りの方法」（軍記文学研究叢書『平治物語の成立』）にも指摘されている。
注5　新日本古典文学大系『保元物語　平治物語　承久記』
注6　「常盤」とも記すが、本稿では「常葉」で統一する。
注7　テキストには、一類本は注5を、四類本は注1を用いた。
注8　「『平家物語』における頼朝像」（『日本文学誌要』一九八四・一）

（かわだ　まさみ・一九六六年卒）